



《会計・税務の知識》 財務分析①

☆デュボン分解

$$\frac{\text{純利益}}{\text{自己資本}} = \frac{\text{純利益}}{\text{売上高}} \times \frac{\text{売上高}}{\text{総資産}} \times \frac{\text{総資産}}{\text{自己資本}}$$

①自己資本利益率 ②売上高利益率 ③総資産回転率 ④レバレッジ・レシオ

《収益性》 《効率性》 《安全性》

はじめに

財務諸表に基づき、会社の収益性、効率性、安全性等を測ることを、「財務分析」といいます。本稿では、財務分析によって得られる各種指標につきまして、上記のデュボン分解の計算式に基づいて、いくつかご紹介します。

1. 各種指標

①自己資本利益率

【 自己資本利益率=純利益÷自己資本 】

英語表記では ROE (Return on Equity)。株主の投資額に対して、どれだけ効率よく利益を獲得したかを表す尺度です。自己資本利益率は、収益性・効率性・安全性の3つの要素に分解して表されることが多く、以下、それぞれの構成要素について、説明します。

②売上高利益率

【 売上高利益率=純利益÷売上高 】

企業の利益率を表す指標であり、値が大きいくほど収益性が高いと言えます。こちらでは分子に純利益を用いておりますが、粗利や営業利益を分子にとり、他社の数値と比較することで、営業の収益性を比較することができます。

③総資産回転率

【 総資産回転率=売上高÷総資産 】

使用資本全体の働きの程度を表す比率です。高率であれば資産が有効に活用されていることを示し、低率であれば無駄な資産、つまり過剰投資や遊休資産が存在する可能性があります。

④レバレッジ・レシオ

【 レバレッジ・レシオ=総資産÷自己資本 】

こちらは、負債の依存度を表す指標になります。値が大きいくほど、自己資本ではなく、借り入れによ

る資金の調達が多いということになります。負債が増加すると、財務状態の安全性は低下しますが、株主にとっては出資する金額に対して大きなリターンを得られる可能性が上昇します。

2. 例—2 社比較—

| <A社> | <B社> |
|----------------|----------------|
| 純利益: 160 千円 | 純利益: 150 千円 |
| 自己資本: 2,500 千円 | 自己資本: 1,800 千円 |
| 売上高: 6,000 千円 | 売上高: 5,500 千円 |
| 総資産: 5,400 千円 | 総資産: 3,600 千円 |

A 社
 自己資本利益率=160÷2,500=6.4%
 売上高利益率: 160÷6,000=2.7%
 総資産回転率: 6,000÷5,400=1.1 回
 レバレッジ・レシオ: 5,400÷2,500=2.16 倍

B 社
 自己資本利益率=150÷1,800=8.3%
 売上高利益率: 150÷5,500=2.7%
 総資産回転率: 5,500÷3,600=1.5 回
 レバレッジ・レシオ: 3,600÷1,800=2 倍

A社とB社の自己資本利益率は、6.4%<8.3%でB社の数字の方が良いといえます。さらに分解して比較してみると、その要因は総資産回転率の差、すなわち、B社の方が保有している資産を効率的に用いて、ビジネスを行っているためであると考えられます。

おわりに

財務分析は数値のみにとらわれず、事業環境やビジネスモデル、景気の動向など、背景となる条件が非常に重要かと思えます。皆様も、財務諸表を読む際の一助となれば幸いです。

(担当: 野村 堯正)